
異世界にて青年、魔法具を売る。

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にて青年、魔法具を売る。

【Zコード】

Z2465BA

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

祖母から受け継いだオカルトショップ（？）を営む山名 透。客は少ないが割りと満足した経営ライフを送っていたのだが。突然の大きな揺れ。気付くと異世界にいた。

1話、山名 透、光る蠅。

授業が終わると同時に山名 透は教室を出る。

「トオルー、映画、見に行こうぜ」

「いやあ、今日、よーじあるし無理ー」

「最近人付き合いわるいぞー」

人付き合いの悪さを指摘する、友人、赤井に透はカラツと渴いた笑顔を向ける。

「多分、当分は付き合い悪いと思うよ」

透は学校の裏門から抜け出し、とある店に向かう。

オカルトショップ、と言うよりはアクセサリー店や骨董品店の印象を受ける陰鬱げな雰囲気の店。

一本、道を隣に行くと大通りで多くの人が賑わっているのだが。その店が接する通りは静かで人は少なく裏通りに分類されるのが人目でわかつた。

透は店の鍵を開け、シャッターを開き、掛けをひっくり返して、開店中と表示する。

学校の制服を脱ぎ。店の奥のクローゼットから黒いズボン、シャツと腰に巻くタイプのエプロンを取り出し、それを着る。

カウンターにある背もたれの無いパイプ椅子に座り、今日も客を待つ。

「今日はお客様来るかなあ？」

机の上に突つ伏しながら、一人じぢる。

うん、美少女がいきなりバイトさせて下さいとか。無いです

かねえ。

そもそも店の名前が良くないのかな。看板取り替えるのとか
金掛かりそうだし。面倒臭いですし……。

オカルトショップ「不幸な黒猫」は高校二年生、透が祖母、山名茜から受け継いだ店であった。

客は少ない。2・3週に1人、運が良ければ2人と言つた具合で、普通なら経営も成り立たないような状態である。

祖母の遺言により大金を手にした透はあまりお金のことでは困つていなかつた。どちらかと言えば客が来ない方が問題であった。

確かに人気の店みたいに行列になるのは勘弁ですけど、1日1人ぐらいの割合で来てくれたつていいのになあ

「暇だなあ」

透は携帯を取り出してゲームでも始めようとしていた。
チリンチリンとドアにつけておいた鈴が鳴る。

入ってきたのは20歳前後の若い女性。

「いらっしゃいませ」

透は椅子から立ち上がらずに軽く会釈する。
女性は店をゆっくりと何度も何度も回る。

どうしたんだろう。探し物かな。

そう思いながら透は声をかけない。

まあ、僕買い物の時は店員から声掛けられたくないタイプだから。

ただ、女性は何度も何度も狭い店の中を回るだけで、透も何か声かけないといけないかな？と悩み始める。

こんなに店内に長くいる客は初めてだつた。大体の客はフランクな感じで目当てのものが手に入れば、さっさと店を去る人が殆どだ

つた。

困りました。接客とか勉強しとけばよかつた。

「何か探しものですか？」

につこりとスマイルを作る透。堅い敬語を使わなかつた。付け焼刃の敬語で恥をかくのは何のメリットもないと思つたためだ。

「え？ ああ、はい」

女性は驚いたようで、そこで少しじどもる

「いい感じの店だなあつて思つてよつただけで、何か欲しいものがあつた訳じやないんです」

「なるほど、うちはどうですか？」

「いい感じに落ち着く店だと思います」

「そうですか」

「はい」

女性が微笑み、透もそれに返して笑つた。

その直後だつた。店全体が大きく揺れた。縦横無尽に。

じ、地震！？

「きや――」

「大丈夫ですか！？」

女性はその場でががみ込み、透は反射的にその女性に覆いかぶさつていた。

時期に揺れが収まつた。

店は特に大きな被害も受けず、少しアクセサリーが散らばつた程度であつた。

しかし、透には大きな異変が襲い掛かつていた。

何だ、これ？

透の視界には、無数に飛び散る光るハエのようなものが見えていた。

1話、山名透、光る蝶。（後書き）

現在、書きだめ23話まであります。それが切れるまでは毎日、1話か2話、投稿しようと思っています。

評価や感想は作者のモチベーションに直結しますので、その気があればどうぞ遠慮することなくしていただけると幸いです。

2話、宇佐美 筒、心地よい。

一瞬、何が起こったのか分からなかつた。

揺れだらうか？

ジワリと恐怖と何かが私の気持ちを支配する。

私は偶然、見つけた店、オカルトショップ「不幸の黒猫」にいた。

正直、散々な就活の日々に嫌気が差していた。

もう、正直、一ートになつてもいいかな？ って思つてた。

もちろん、そう思つたからつて、そう言つ行動が出来る訳じやないのが、現実。

どこか遠くに逃げ出してしまつたかつた。

散々な日々に、鬱屈としていた。

そんな時だつた、「不幸の黒猫」を見つけたのは。

何と言つか、店の名前に惹かれた。今の心情は、自分の悲劇に酔つてゐるヒロインの心情に似てゐるのかもしれない。

店は物静かな感じでウロウロしていても店員さんはほつて置いてくれる。

自分の自由みたいな物を仄かに感じた。

もちろん、日々不自由だと思つてゐる訳じゃない。

ただ、この店ではそう言つ自由とは別の自由を感じた、狭い自由と言つべきか。なんとも詩的な表現である。

店員さんは20歳ぐらいだろうか、ほつそりとしていて、何と言
うか、線の細い系男子（？）って感じで、イケメンとまでは言わな
いが普通にかっこいい男の方だと思う。身長は随分、高そうだ。立
つたら180センチぐらいはありそうだ。

店員さん、特にこじらに干渉してこよつとする様子はない。いい
店だと思った。

何かを買いに来た訳じやない、何かを買つつもりも無かつた。
冷やかしだ。

何週も何週も狭い店の中を、回つていると、唐突に声を掛けられ
た。

さつきまで、ほつといて欲しいと思っていたのに悪い気はしなか
つた。店員さんの声も透き通る感じのいい声で心地よかつた。

私が笑うと、店員さんも笑い返してくれた。何とも、うん、魔力
というか魅力のある笑顔だと思つ。

儂い。

その時だつた、店全体が揺れた、縦横無刃に、と表現するのが適
切だと思う。

やたらに揺れた、ちょいビリキサーにいれられたら、こんな感じ
じゃないだろうか？

揺れたというより、半ば回つたといった方が正しいかも知れない。

私は叫んだ。

店員さんは私に覆いかぶさつた、心地よいと思つた、安心感があ
つた。

不謹慎ながら私は大きな揺れに、恐怖しながら……少し「ワクワ

ク」していた。

そうだな、ちょいど、絶叫系のジノットゴースターに乗るような
気持ちに似ていると思ひ。

2話、宇佐美 篠、心地よい。（後書き）

1話1話が短いと感じる人がいるかも知れません。すみません。
1話のタイトルは「一話、語り部、一つ単語」と書いた形にしよう
と思います。

作者が side、誰 と言う表現法を使うことが苦手なた
めです。（読む分には全然気にならないのですが）
ので一話、一話タイトルをチェックしていただけすると読みやすくな
ると思います。

誤字脱字の報告は気軽ににして欲しいです。見直してはいるのです
が自分ではなかなか気付かないことが多いので。

3話、宇佐美 篠 、痛い子。

「だ、大丈夫ですか？」

何と言つか、この店員さん、やつぱり線が細い。

「はい、その……大丈夫です」

「何じゃこりゃ――――！」

外から大きな声が聞こえる。

古いネタだなあ、誰かが太陽に吠えている。

「どうしたんでしょうか？ 外で何かあつたのでしょうか？」

私は店員さんに尋ねてみるが、店員さんは何故かほうけて、宙を見据えている。

「あの？」

「な、何ですか？」

私は少し驚く。ちょっとビクッとした。

「何か、光る蠅のようなものが見えませんか？」

「いえ、何も見えませんが？」

「どうしたんだろうか？ 痛い子？」

重度の厨二病？

「すいません、変な質問をしてしまって、ちょっと頭を打つてしまいまして、変な感じがして」

「大丈夫ですか！？ その、私を庇つて」

何か申し訳ない。さつき思つたことを取り消したい。

「いえ、大丈夫です、頭を上げたとき後ろの棚で打つただけですか

ら」

店員さんはカラカラ快活そうな渴いた笑いを作る。実が伴つてない笑顔なのだが、安心する。

「また揺れが来ても困りますから、わざわざ外に出ましまよ。」

「あつ、はい」

店員さんは立ち上がり店のドアを開けつつある。
ガチャガチャとドアノブを回すが開く様子がない。
シーン

「困りました、開く様子がありません」

「そうですね」

淡々と状況を告げる店員さんに、私は少し困る。

「少し建て付けが悪かったんですよ、このドア」

バツが悪そうに言い訳をする店員さん。少し好感がもてる。

「そうみたいですね」

何故か店員さんはいつも笑顔だ、営業スマイルとはまた違うのだが、何と言つか可愛さとかを感じさせない笑顔。

「少し離れていてください」

「え？」

バンッ！！

「店員さんはドアを蹴破った！！」

「実況しなくてもいいですよ？」

「少し、驚きました」

本当はかなり驚いたのだが。

「そうですか？」

「なかなか、ワイルドな店員さんですね！」

「そうですか？ そうですね、お客様さんは少し嬉しそうですね」

私は少し嬉しいのだろうか？
違う。

私は少し「ワクワク」しているのだから。

外いでた瞬間だった。

「今度は凄く驚きました」

私は啞然とした。ここまでとは。

「そうですねえ」

店員さんはいつも通り一々一々している。驚きがあまり伝わってこない。

新手のポーカーフェイスと言つ奴だろうか。

外に出ると、森が広がっていた。

瓦礫が転がり、若むした地面のところどころに、アスファルトが浮き上がっている。

両隣にあつた自転車屋は半壊、パン屋は木が貫いていた。

何より、一番驚いたのは、金髪の感じの悪い刺青をした、四十年ほどの男が、縁のシワシワとした肌を持つ小さな化け物……

「ハーリンのような化け物に襲われていることだった。

3話、宇佐美 筍 、痛い子。（後書き）

この話は結構だらだらしている所があります。

基本、書き溜めが在るぶんは毎日22時か23時に投稿しようと
思つのでよろしくお願ひします。（作者の事情にもあります）
基本23時に投稿しようと思ひます）

明日は休日なので12時に一話、23時にもう一話投稿しようと
思つてます。（上に書いた法則からされる場合は、このように前の
話の後書きで出来るだけ明記するようにしたいと思つてます）

4話、山名 透、ズルズル。

「すみません、あれは何でしょつか？」

僕は少し自分の無知を恥じた。

あんな、縁のシワシワとした肌を持つ腰ぐらいの高さの大型の生き物、始めて見た。

少なくとも動物園や図鑑ではあんな生物、見たことがない。

「すいません、私も良くわからなーのですが、おそらく『ゴブリン』と呼ばれるものじやないでしょつか？」

お密さんの言葉で余計に、あの生物の正体がわからなくなつた。
「すいません、芸能人とか疎くて。新手のアイドルとか、そういうのでしょつか？」

「ゴブリン？」

「その、少しひどい」とを言つますが、私の目には随分、不細工な縁のシワシワに見えるんですか？」

お密さんは、こっちを見詰め少し可笑しそうに笑つ。

「えーと、店員さんはゲームとか、やらないんですか？」

「はい、携帯ゲームをたしなむ程度で」

少し恥ずかしいな。後頭部をかく。

「インターネットとかも、あまりやらなーの？」

「とても、現代人とは思えません」

お密さんは絶滅危惧種でも見るよーな、驚愕の目でじーじーを見る。

「その、どう説明したらいいのか」

お密さんは少し難しい顔をする。

「そのゴブリンって言つのは架空の生物で、人間を襲うモンスターに分類される生き物で……」

「ああ、ハリー・ポターで出てくる、屋敷しもべ妖精が凶暴化し

たようなのですか？」

「そうです！ ちょうど、そんな感じです！」

お客様の中でしつくり表現だった様で結構満足している。

なんか、今の僕は人前な所為か気分が敬語的だと思つ。

正直疲れる。

「あの店員さん、助けないんですか？」

お客様に聞かれた。

「あ、僕の名前、山名 透つてています」

「トオル君ですか？ ヤマナさんですか？」

「どっちでもいいです」

「私は宇佐美 笠です」

お客様も名乗つてくる。まあ、こっちが名乗つたので名乗り返しただけだけ。

「じゃあ、ササさんは呼びにくいで、ウサミさんつて呼びますね」「はい、あつ、でも、さん付けじゃなくていいですよ？」

「失礼ですが何歳ですか？」

「失礼ですねえ、22歳です」

失礼と言いつつも、年齢を教えてくれるウサミさん。ギャグキャラ

うなのか？

「僕は18歳なので、やはり、さん付けになりますね」

「うそ！ トオル君そんなに若いんですか？」

「そんなにって言つても、四つしか変わりませんよ？」

あと、年下だったからだつて、僕の呼び方はトオル君に決定したよつだ。

「あつ、死んじゃいましたね、ヤクザっぽい人」

ウサミさん、人が死んだのに軽い。

「そうですね、まあ、棍棒で四方八方から殴られたらヘビー級ボクサーでも一分も持たないんじゃないでしょうか？」

ヤクザっぽい人がズルズルと引きずられて行く。

やつぱり、ゴブリンは人間と同じで雑食なのだろうか？

人間も食べるのだろうか？

「ゴブリンさん、ヤクザさんをお持ち帰りですかねえ？」

「テイク アウトですね！」

ゴブリンはズルズルとヤクザさんの死体を引っ張っていく。

「ウサミさん、少し楽しそうですね」

「不謹慎ですか？」

「そうじゃないでしようか？」

暫定ヤクザのような人、略してヤクザっぽいとは、血痕を残して森の中に消えた。

4話、山名 透、ズルズル。（後書き）

基本、前書きは使わないよしありと想つてます。

作者が携帯で小説を読むときに前書きが邪魔だなあつて思つたりすることがあるからです。

あと、基本後書きは毎回書いつと想います。これも携帯で閲覧するときあつたり無かつたりすると「うーん」つて思つたりするためです。

「やつぱり、あの人、ゴブリンに食べられちゃったのかなあ？」
私は今更ながら怖くなってきた。

ただ、怖くなつたが、「ワクワク」も増していた。

現在、私は「不幸な黒猫」の2階の生活空間にお邪魔をして、貰つていてる。

トオル君はとりあえず店の整理と少し周りを見回つてぐると言つて、一旦ここを出て行つた。

「異世界トリップ……ふふふ」

私は今おかれた状況を恐怖しながら堪能していた。
多分、私一人じゃあ、泣き崩れてゴブリンのエサになつていたと思つ。

「それが今、僕達が置かれておる状況ですか？」
「と、トオル君！」

音もなく、後ろには家主が立つていて。
さつきまでは付けていなかつた、モノクル……片眼鏡や腕輪をつけている。

「そろそろ、夜になります」

「あ、はい」

「と言うか、もう暗くなつて来てます」
「そうですね」

「正直困りました、電気も水道もガスも駄目です」

「やはり、そうですか」

「異世界トリップと言つものについて説明して欲しいのですが」
「うん、まあ、この子、ファンタジーとか疎いんだよ。
現代人とは思えないほど、うとい。」

「異世界トリップって言つるのは、言葉通り異世界に転送されたり、

何かが原因で偶然、異世界に迷い込むことを言います

「タイムスリップみたいな物でしょうか？」

トオル君、何かズレてる。

「似ていますが、全然違います

「はい」

「要するに、異世界トリップって言つのは、ファンタジーの世界に迷い込むことを言います」

トオル君は首をかしげる。

「本や漫画の世界に迷い込むってことですか？」

「さつ わよつは近くなりました、とりあえずわうわうの感覚でいいです」

「一々、根本から説明するのは骨が折れる。

せめて、ファンタジー系のゲームをやつたことがあつたら、説明は早いのだが。

「えーと、じゃあ、例えば理由と云つのはじつこつじが理由になるのでしょうか？」

「作品にも寄りますけど、だいたい、テンプレ的には、どこの国の王様に召還された、とか、神様やそれに準ずる存在に何らかの理由で異世界に行くように提案、または強制されるつていうのが、大体の流れです」

「成る程」

トオル君は考え込む。

「神様の方は置いておいて、何故、王様は異世界から人間を召還するのですか？」

「えーと、大体は召還される側の人間に勇者とか絶対的存在になる資質があつて、旅に出て魔王とか人間を敵対するものを、倒して欲しい、と言つのが理由です」

「うん、なるほど」

「異世界トリップの場合は大体、中世ヨーロッパぐらいの文化レベルをイメージしたいいと思います」

「女王やら騎士やらですか？」

「そうですね、あまり科学が進歩していなくて、その代わり魔法が発達していると言つのが相場ですね」

「ウサミさんの知識は凄いですね」

「あなたが何も知らな過ぎるだけです！」

「魔法って言うのは」

「あつ、魔法の説明は大丈夫です」

「はい」

「映画とかで見たことがありますし、それに……」

「そこでトオル君はそこで後ろポケットを探り出す。

「それに？」

指輪をはめる。

「どうやら、僕、魔法が使えるようですね」

そういって彼は暗闇の中人差し指の上に小さな火を灯した。

5話、宇佐美 筒、魔法。（後書き）

テンポはいいでしょう？ 作者自身は遅い方だと思つんですね。
テンポの速い作品なら5話で「ギルド」とか出てきたり初戦闘ぐ
らいは終わつてると思つんですね。
テンポの遅い作品ですが付き合つていただけないと幸いです。

6話、山名 透、火柱。

「どうして魔法、使えるんですか！？」
ウサミさんは随分驚いている様に見える。

「どうも、この指輪の効果のようです
金色の指輪をはずして見せる。

「私にも使えますか？」

ウサミさんの顔は喜色満面の笑みを浮かべる。

「やってみますか？」

ウサミさんはガクガク頭を縦に振る。糸が切れた人形のようだ。
少し愉快。

ウサミさんに指輪を渡す。

まるでプレゼントをもらつた子供のようで可愛い。

「どう、どうやるんですか？」

ウサミさんは指輪と奮闘している、グヌヌヌつて様子だ。

「えーと、指輪に熱を込めるイメージです」

少し違うのだが。そんな感じだ。

「オオオオオオオ

火柱がたつた。

勢い良く。

「きやつ」

「大丈夫ですか！？」

ちょっと僕は大きな声を出しただけで駆け寄ることは無い。

暗くて危ないから。

「すいません」

「ああ、指輪だめになっちゃいましたね」

ちょっとガツカリ。

ウサミさんは指輪を見詰める。

「あの、どこも変わつてないんですけど?」

「はい、でも光るハエが散つてしまつたので

「光るハエ?」

少し怪訝な顔をする。

「はい、どうやら僕は魔法を使える道具の周りに光るハエみたいな物が見えるみたいですね」

「精霊とかマナってやつですか!?」

ウサミさんは一転して興奮した声を出す。

「えつと、そりなんじやないでしようか?」

身を乗り出すウサミさん、身を引き、逸らす僕

「すいません、つい取り乱して」

「いえ、気にしませんよ」

うん。

「そう言えども、ウサミさんは世に言う腐女子と言つ奴なのだらうか?」

「ウサミさんは、ウサミさんは腐女子なんですか?」

「へ?」

「ウサミさんは腐女子なんですか?」

「そ、そうですが、何か文句でも!」

ウサミさんは若干、怒つている様な悲しんでる様な。

「へえ、腐女子の現物つて初めてみました、ちょっと感動です」

「ほ、ほう」

ウサミさんはどのタイミングで喜んで、どのタイミングで落ち込むのか良くわからない人だ。

「そう言えども、ウサミさんはこれから、どうあるんですか?」

僕は至極当然の質問をウサミさんに投げかけた。

「……………<?
カナリもせぬ固めた。

6 話 山名 透、火柱（後書き）

今、弟の「I pod」の「ゆけー勇者」と言つてゲームにはまっています。放置型RPGと言う特性を利用して、PSPで「勇者のくせになまいきだ」をプレイしながら、数分おきに弟のI podの勇者を見に行くつもに子をやらしてもらつてます。

このゲームの自分のプレイになぞつて小説を書くなんて結構、樂でいいなあとか思つたりします。

感想、評価、誤字脱字の報告などどうぞお気兼ねなく。

そう言えば、勝手に私はトオル君ずっと一緒にいるものだと思つていた。

うん、トオル君が私を養つてくれるって決め付けてた。
いや、もしかしたら、トオル君、優しいから頼み込めば養つてくれるかも。

「トオル君、い、いえ、トオル様、私を養つて下さい！」

「いやです」

「ですよねー。」

でも、私、トオル君に捨てられたら、路頭と言つか森？ を彷徨うことになるし。

てか、こんなところで、彷徨つたら確実に「アブリンのHサだし。ここは粘るしか……

「そこを何とか！」

スタイルッシュに「Hサ」は、上下座に限る。

「とりあえず顔を上げてください」

はつ……

そこで、働かない私に差し掛かる一筋の光明。

「働かざる者、食つべからず、です」

「ですよねー」

終わった、私の人生終わった。

「そんな、人生終わったみたいな顔しないで下さい、別に今すぐに出て行けって言つてる訳じやないです」

「へ？」

「どうちにじる、今ここを出て行くのは危険です」

「どうじにじことですか？」

まあ、「アブリンは危険だけど、そう言つ意味じやなさそうだ。

「えーと、どうやら異世界転送されたのは僕達だけじゃなくて、こ

の辺一帯だって事はわかっていますよね?」

「うん」

「で、どうも、僕達のほかにも大体30人ほどこの世界には、地球人がいるようです」

「ふむふむ」

「どうも、その中にあまり行儀の良くない様な人達がいるようです」「と、言いますと?」

「どうも、数人の不良少年なんですが、どうも今はゴブリン狩りを楽しんでるようです」

「ゴブリン狩り!…危なくないんですか!?」

「どうも、ゴブリン自体はあまり強くないみたいですが、そこいら辺の棒でも拾つて闘えば、困まれない限り、正直ゴブリン相手に一騎当千も簡単みたいですね」

「でも、ゴブリンと闘つてるんでしょ」

「いつ、丞先が人間に向くかわかつたものじゃないです、遠目から見ても、暴走しているのが目に余ります、それに」

「それに?」

「どうも、女性を捕らえて、無理矢理、やっているようです」

「それって!…」

「ここでは、彼らを咎める者はいません、彼らは強いですから」「でも、トオル君なら!」

「あるいは、彼らに制裁を与えられるかもしれません、ただ、それはリスクですしどっちにしろ、僕は昼間、ヤクザさんを見殺しましたから……確かに同じ女性のウサミさんには、ほつておけない事かもしだせんが、でも、ひどい言い方ですが、僕には他人事です」

「あなたの行動原理は滅茶苦茶です、それなら、私も見殺しにすればいいのに!」

トオル君は目を閉じる。

怒っているのだろうか? 私。

違うな怒つていない、憤つてるんだ。

ちょうど、ネット小説の主人公のキャラがブレた時に感じる批判に似てる。

でも、違う、彼には彼なりの……。

すいません、カッとなつてしまつて

「いえ、ウカミさんが怒るのは当然です、いらっしゃりや、すみません」頭を下げるトオル君を見て情けなくなる、自分が年上なのに。

۹۷

マウザルンは義理に立つたのだが

「でも、何で『ゴブソンの巣なんて』

「さつき、働くがざる者、食うべからずつて言いましたが。現状、働くなくたつて時期に食事にあり付けなくなります。根拠はあります
んが、おそらく「ゴブリンは雑食でしょう」

第三章 亂世の果たせ

「アーヴィングの着物で着ていいよ。」

「第一の目的として」

私のツンテレはスル!!

「第一の目的として、水源の確保があります。いくら、ファンタジ

「たからで生物ですし、水は必要とすると思います」
「でも、トオル君、前世の知識をここで当てはめるのは、危険だと

思
う

「まあ、そうですね、どちらにしろ探索途中に川でも見つけられたら、ワッキー程度にも思ってます」

「うん」

「それに、おそらくゴブリンが食べられるものなら、人間でも食べれるでしょう」

「？ どういふこと？」

「例えば、今、店の目の前には赤いリンゴのような実のなつた木がありますが、あれは食べられるのでしょうか？」

「毒つてこと？」

「そうです、お腹を下す程度ならいいですが、致死性の毒や蓄積する危険な毒があつたら、たまりません」

「大丈夫じゃないの？ リンゴっぽいし」

「揚げ足取りますが、前世の知識をここで当てはめるのは、危険です、特に食は命に関わりますから」

「う、確かに」

「それに、上手いことゴブリンを捕らえることが出来たら、毒味にも使えるってこと」

「そうです」

「そちも、悪じやのな」

「？ はい、そうですね？」

「駄目だ、この子、お約束が通じない」

「出発は明日か明後日の明るくなつて来るぐらいがいいです」

「不良連中が寝ている間につて事か」

「目的は、ゴブリンの蓄えの強奪、毒味ゴブリンの捕獲、水源の確保。優先順位は言つた順でいいですか？」

「トオル君は、なかなかエグイねえ」

「どうせ、人間が自分のゴゴの為に他の生物を、じいたげるのはいつものことですよ」

7話、宇佐美 篠、Hiro. (後書き)

今回はなかなかまともなタイトルをつけたと自負しています。

明日は21時に投稿することになると思います。

誤字脱字の報告、評価、お気に入り等。お気軽に。

私、山名 真理の兄、山名 透は頭がおかしい。

昔から。

昔と言つてもいつからかは、わからない。

ただ、頭がおかしいと初めて思ったのは祖母の葬式の時だつた思う。

父も母も、表面上悲しんでいたが、内心喜んでいたんじゃないかなと思う。

私も何故かほつとしたことを憶えてる。

私の父方の祖母、山名 茜は親戚から随分煙たがられていた。理由は知らない。知りたいとも思つたことは無い。

兄は頭がおかしかつた。

兄は随分、祖母に懐いていたと思つ。

グランドマザコンとでも言つべきか、何か強そう。

葬式で兄だけが号泣していた。慟哭と言つてもいい。

兄だけが祖母の死体にすがり付いて泣いていた。

私の目には、祖母は随分自由人に見えた。

祖父とは離婚していて、気味の悪いアンティークショップを営んでいた。

兄は毎日、祖母の店に通つていた。

母に叱られても、父に殴られても、私がさげすんでも、やめなかつた。

兄は家族の邪魔だつた。家族の亀裂だつた。

兄は随分、無欲な人間だつたと思つ。

誕生日もクリスマスも子供の日も、何も親には、せがまなかつた。親も逆に手を焼いたと思つ。

「お兄ちゃんはなんで、あんな人の店に毎日通うの？」

「そう兄に聞いたことがある。

「マリも、バアちゃんが嫌いなんだねえ」

そう言つて、兄はカラカラ笑うだけで、私の質問に答えなかつたのを憶えてる。

私は恥ずかしくなつた。

言外に「お前は周りにつられてるだけだ」と言われた気がして。無償にムシャクシャして夜中、兄をボツコボコにした。やり返さない兄に、余計腹が立つた。

家族の関係が最悪になつたのは、祖母の遺言が見つかつた時だつた。

祖母の遺言には、店と財産は全て兄に譲ると記してあつた。そんな遺言が合計、15枚見つかつた。

誰も祖母に金があるなんて思つてなかつたから。余計に苛立つたのだと思う。

ゼロが7つに頭に8、八千万、子供に渡すには法外な額だと親戚が訴訟や裁判を起こし。家族も大変だつた。

お金もまつとうに稼いだお金で何の問題も無かつた。

私も兄が羨ましかつた。こんな事なら少しでも祖母によくして置けばよかつた、こんな事なら少しでも兄と仲良くして置けばよかつた。

あの時、どうして、あんなたんだろ。そう思つ。

全ては兄が悪い。

「3千万ここに、置いていきます、話し合いでも、裁判でも、殴り合いでしても、みんなで仲良く分けて下さい。これ以上僕に関わらないで下さい」

兄以外の親戚全員が集まつた会議だった。

そこにいきなり兄が現れて、紙袋を長机の上にドサツと置き、言い放つた。

その瞬間、一致団結していた箸の親戚の間で乱闘が起つた。

「汚い」

兄はそう一言、笑いながら口元にして、その場から消えた。

あれから数ヶ月。

あんな紙ぐずに何の価値があったのだろう、今になつてそつと思つ。少なくとも乱闘するほどの価値は無いと思つ。

唐突な揺れだった、予震も無かつたと思つ。

氣付いたら森の中、縁のシワシワとした化け物、そう、ちょうどRPGでてくるモンスター、ゴブリンかコボルトのような化け物に囲まれていた。

どうでしょうか。唐突に新キャラです。

テンポが悪くなる原因ですね。

ただ、作者は無駄に伏線巻きまくりたいタイプの人間なんです。
それを回収することをメンドくさがる、あまつさえ「もう伏線な
んて回収しなくて良くない？」などと思つてしまつので、余計にタ
チが悪い。

感想などなど。よろしくお願ひします。

9話、山名 透、血痕。

「すいません、寝過ごしてしまって」

田の前でウサミさんは土下座している。

何と言つかプライドの低い人だ。

「大丈夫ですよ、どちらにしろ僕も疲れてましたし、ゴブリンの巣の探索は明日でもいいですから」

血痕が消えない限り、巣の位置がわからなくなる事はないし。どちらにしる、ゴブリンはあまり頭が良くなさそうですから、血痕の向きに直線に歩けば、簡単に巣に辿り着きそうですし。

「本当にすいません」

「いいですよ、気にしてませんから、あと、はー」皿に乗せたパンと白桃を渡す。

「缶詰です」

「ありがとうございます」

「えーと、今後の方針について話しませんか?」

軽く話題を振つてみる。

「ぎくつー！」

「口で効果音を出さないで下さー」

「捨てないで下さー！ お願いしますーー！」

本日、一度田の土下座。

何と言うか値値の無い土下座。

「今のところ、捨てるつもりはありませんから」

「はー！ 私、一生トオル君の寄生虫になりますーー！」

「それは駄目です

「ですよねー」

なんというか、この流れ、お約束になつつある。

「えーと、僕は正直、店さえ続けられれば正直、元の世界に帰れなくていいかな？ って思つてます

「私も樂さえ出来ればどっちでもいいです」

何と書つかウサギさんホールの鑑だと思つ。

「ですから、ゆくゆくは街や都市に出たいと思つてます」

「わたくしも、おちのん付けて来るなら、動いては貰いませんよ？」
「わたくしも付いて行きませう！」

「……お、おひー。当たり前じゃないですか、旦那！」

まあ、妙な間があつたけど氣にしない。

「それで、経営とかするに当たつて他の人から死守したい、魔法具

「可そへ!! フクテカ!!

わくてかって何でしょう、まあ、どうでもいいですが。

「一つせりの片眼鏡」

「うん」
「一の」「限界」には、魔法具の効果を調べる効果がついてます、二つ

この用賀鉄に「
はかなり重要です」

これが無いと、一々、魔法具を使って効果を調べなければならな

「次こそ置いたままで、黒い蓋といつか鍋のよつなもの

です

「どういう効果なん?」

「15日に」一度ほど魔法具をランダムで生成する効果です」

かなりの便利品だ。究極的には片眼鏡を失つても、釜さえ残つてればなんとかなる。

「最重要アイテムですね」

ウサギさんは若干、驚いている。

「そうです、だから、この2つは死守したいと思います」

「あべ、つか॥わざは渡しておへやのあつめか」
「アハ、ヤハ、ジヤハ、ハム。

「な、何ですか、これ！？」

「何ですかって、魔法具と銃です」

ウサミさんはかなり呆れている。

「魔法具はともかく、何で拳銃を持つてるんですか！？」

「昨日の夜のうちに回収しておきました、ヤクザさんの遺品です」

「何で私に……ハア」「

おそらく、ウサミさんは今、気付いた。

「はい、そうです、不良少年の手に渡ると、暴走を助長することになるだけですし。ウサミさんの護身用に使ってください」

「いつの魔法具は？」

「手の平サイズの火の玉を投射する使い捨てタイプの魔法具です」

ウサミさん、うんと首を縦に振る。

「回数は3発程度で、使い切ると錆びて、崩れて、砂みたいになります」

「了解

「そつちも護身用に使ってください」

「あいわー」

「あと、昼間は出来るだけ外出しないようにして下さー」

「不良少年に拉致られるから？」

「そうです、もしそうなつても助けませんから」

「冷てーなあ、トオル君」

「そうですか……」

ガシヤ、ガシヤ、ガシヤ。

シャツターを叩く音。

何か言葉を続けようと思つたのに。

「ウサミさん、念の為、奥のほうに隠れて下さー」

「えつ~」

「多分、不良の連中だと思つます」

9話、山名 透、血痕。（後書き）

ある程度、一々説明しなくともわかる察しのいい人物を書きたいです。

小説を書くのがラクになつわつ何をするやめ
すみません茶番でした。

何で俺が変なオカルトショップに駆り出されなくちゃ、いけねーんだよ。

アキラはこっちの世界に来て調子に乗り出した。

まだ、異世界に来て一日しか経てないのに、確實にこっちの世界では身分、ヒエラルキーが完成していた。

「ちくしょー、このまま下つ端とかありえねーし

つーか、「ジマモ、カネムラモ、イトオモ、キジマモ調子に乗つてる。

俺の方がゴブリン倒してるのに、俺に命令してきやがる。上手い事へりくだつてアキラに気に入られただけのクズだも。

つーか、今、俺がパシられてる間にも、あいつら女とやつてるこ決まってる。まじ、羨ましい。

アキラは化け物だ。

笑いながらゴブリンの頭割つて楽しんでやがる。もともとはそういうやなかつた。

どつちかつて言つと、俺らの中じやおとなしい方で、ビビリとかイチビリとか言われた奴だつた。

こっちの世界に来てからだ、アイツは吹つ切れた、つうかぶつ壊れた。

ゴブリンを狩ること楽しんで、女捕まえてやりまくつてる。イカれてる。

感覚もイカれてる。まるで後ろに目があるみたいに。背後から襲つてくるゴブリンを叩き潰したり。かなりの距離があるゴブリンを

見つけて叩き潰しに行つたり。化け物みたいな感覚だ。

「うちに来てから、調子良いとか、俺は進化したとか言って、昨日は「プリン叩き潰しまくって疲れきった後に女とやりまくってた。」プリン狩り、強姦、漫画喫茶の占拠。もひもひ、完全にイカれてる。

アキラには逆らわない方が良い。

ガシャ、ガシャ、ガシャ。

ムシャクシャしてシャッターを蹴りまくる。やまあ。

「いんだろ！ 出て来いよー！」

俺が叫ぶとガラガラとシャッターが開いて、結構身長の高い男が出てくる。

「何ですか？」

「食料よこせ」

「ここで、相手には有無を言わせない。せつせと食料だせばいい。」

「何ですか？」

男は二口二口笑つて、質問してきやがる、せじつとおじい。「せつせと食料だせつてんだ！」

怒鳴つてやる、せつせとしろつての。

しかし、男はせつと変わらず二口二口したままだ。

「キミ、名前はなんて言つの？」

「今、カンケーねえだろ！」

だんだんイライラしてきた。

「僕はシモカワ ツトムって言つんだあ」

「はあ！？」

「それは、俺の名前だ！！」

「不良グループのリーダーのパシリで二下なんだあ」

男はニヤニヤと笑つている。

「フザケんな、てめえ！！」

「あははは、図星があ」

男は「口」「口笑つて いる。

殺す。

「やめときなよ?」

「はあ！？」

「僕は君が後ろポケットからナイフを引き抜くより速く、キリを殺せるんだよ、シトム君？」

「な、何でわかつたんだよ！？」

男は笑顔のままだ。

不気味だ。

「ほら、食料」

不気味な男は扉の奥から袋を取り出す。

「な、缶詰！？」

「不服かい？」

「何で、俺の用件がわかつた！！」

「え、どうじうこと？」

「俺はあんたがここに降りて来てから、用件を言つたんだ！ 取りにも行かずに袋を出したつて事はあらかじめ用意してたつてことだろ！！ それにあんたは俺の名前を知つてた、どうじうことだ！？」

いらっしゃる。

イライラするけど……、ここつは不気味だ。

「うーん、どうでもいいじゃないかな、そんなこと」

俺の名前を名乗つた男はケラケラと笑う。本当にどうでも言つて言つ風に。

「な、何だよ！、何なんだよ、お前！！」

「僕が、誰とか、キミが何とか、キミがパシリとか、どうでもいいじゃないですか？」

男は笑う、何が楽しいのか、何が愉快なのか。

不気味以外の何でもない。

「つ、ちょ、調子に乗るな！！」

「不服に思つてるんでしょ、今の現状を」

男は笑う、ニヤニヤと、カラカラと。

ああ、そりか、アキラはアキラでやばいけど。こいつはこいつでヤバイ。

「何なんだよ、てめえは！」

自棄になつて叫ぶ、俺は完全にコイツに飲まれてる。

「明後日……」

男は俺なんて眼中に無いよつて呟く。

「あ、は？ あ、明後日？」

「そうだな、明後日がいい、適当な理由を付けて、また来て。不服なんでしょう？ 協力してあげるから」
ガタンと男はドアを閉める。

「はっ、はは、ははははは」

俺は糸でも切れたよつな錯覚に陥り、数分、立ち上がれなかつた。

10話、下川 勉、パシリ。（後書き）

右脳

「キャラが薄くなつた奴から死ぬ。そんなメタな短編が書きたい……」

左脳

「右脳、あなた疲れてるのよ」

まったくどうでも良いですが作者は左利きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2465ba/>

異世界にて青年、魔法具を売る。

2012年1月14日23時15分発行